

収縮期血圧の推奨目標値以下への降圧で心疾患・全死亡リスクが有意に減少

これまでの臨床研究により、収縮期血圧の低下が心臓血管病や早死の減少につながることを示されているものの、最適な降圧目標値は明確になっておらず議論が続いている。本研究では、降圧治療を受けている高血圧患者を対象に、治療により到達した収縮期血圧値と心臓血管病および全死亡のリスクの関連について評価した。

2015年12月までのMEDLINEとEMBASEを検索し、成人高血圧患者を降圧薬と対照または治療目標にランダムに割り付けたランダム化比較試験を選出し、さらにそれらの参考文献を手動で検索した。到達収縮期血圧の平均値の差が比較群間で5mmHg以上のものを解析の対象としたところ、42の試験、144,220例が対象となった。解析の結果、到達収縮期血圧の平均値と心臓血管病、全死亡には、ほぼ線形の関連が認められた。到達収縮期血圧の平均値120～124mmHgのカテゴリーが最もリスクが低かった。

130～134mmHg、140

～144mmHg、150～154mmHg、160mmHg以上に対する主要な心臓血管病のハザード比は順に0.71、0.58、0.46、0.36であった。同様に、全死亡のハザード比は0.73、0.59、0.51、0.47であった。

したがって、現在推奨されている目標値よりも低いレベルへの収縮期血圧の低下が、心臓血管病や全死亡のリスク低減と有意に関連することが示された。今回の所見は、厳格な降圧療法を支持するものとなった。

出典：Journal of American Medical Association. Cardiology. 2017 May 31.

doi: 10.1001/jamacardio.2017.1421.